須田国太郎の絵画技術について

山形大学　小林 俊介

須田国太郎（1891-1961）は近代日本美術史において特異な位置を占める画家とみなされてきた。ヴェネチア派やエル・グレコら西洋古典絵画の研究に立脚しながらセザンヌにも傾倒し、近代的な「レアリスム」を目指したという評価の一方で、しばしば奇異なものと伝えられてきたその絵画技術と作品や理論的著述との照応については必ずしも合理的な説明がなされていない。「引っ掻き」や「削り」が多用されるその作画過程は「描いたというよりも消した画だ」（北脇昇）と評されてもいる。

結論からいえば、須田の絵画技術は下層を意図的に露出させ、上層の塗りとの層状／相乗効果によって視覚的な効果を得ようとしたものであった。いうならば下層を「塗り残した画」である。その技法はマックス・デルナー（Max Doerner, 1870-1939）が提唱した西洋古典絵画の作画技法によるところが大きい。デルナーは古典絵画にみられる、明部から暗部への移行調子における光学的灰色（optischen Grau）の効用を力説しており、この灰色は混色による灰色よりも彩度が高く鮮やかである。この視覚的灰色は明部における白色を中心とした賦彩、すなわち白色浮出（Weißerhöhung）を暗部に向かって徐々に薄く塗ること、換言すれば暗部における下層の「塗り残し」によって得られる。須田の油彩画の随所に見られる塗り残しは、混色による色調の混濁を防ぎながら階調を充実させることに役立っている。

塗りつぶしと描き起こしを繰り返すと伝えられる須田の作画過程もまた、デルナーの提唱する技法の応用とみられる。デルナーによれば、古典絵画においては透明な上塗りと白色浮出を繰り返す重層的な技法によって階調や色彩を充実させている。これは須田作品に特徴的な明暗対比の強調には勿論、須田のいうバロック期の絵画の欠点である暗部の単色化を克服し、暗部の色調の回復にも役立つ。

下層の「塗り残し」を活用する須田の絵画技術は、転調（modulations）すなわち色彩の階調の組織化によって画面を構築するというセザンヌの作画理念とも照応している。印象派やセザンヌの作品における筆触分割、須田のいう色彩の「並置法」は視覚混合によって混色による色彩の混濁を防ぎながら階調を充実させようとするものであった。須田は「引っ掻き」や「削り」によって下層を覗かせて上層の絵具との並置的な効果を狙うとともに、画面の上層に並置的な賦彩も行っている。

須田のレアリスム、「油絵の光輝表現法」の核心は固有色を否定した印象派的な視覚表現を止揚し、物体の「動かざる色」を表現することにあった。下層の「塗り残し」を階調表現のために活用する須田の絵画技術は、古典絵画の「重層法」と近代的な「並置法」を綜合し、「動かざる色」を表現する手段であったと考えられる。